

地域の活性化をめざして あなたの活動が皆を元気に

地区別委員研修

農業会議は1月下旬に府内4地区で地域の活性化をテーマとした農業委員・農地利用最適化推進委員等研修会を開いた。新規就農者の育成に取り組む(株)ファームサポーターズ・ラボの岡部由美子代表取締役は、女性農業者と地域が輝くためにと題した講演を行った。農業ジャーナリストの榎田みどり氏は、食料・農業・農村基本法改正に向けた「新たな展開方向」に盛り込まれた「多様な農業人材」に着目。多様な農業人材を活かした全国各地域の取り組みについて解説した。

事例報告では、泉佐野市内で古民家を活用した地域活性化に取り組む「さの町場家守舎 まちばの芽」の橋本健一代表から報告を受けた。

各地区で参加した約200人の農業委員会委員は、ヨガ体操体験でリフレッシュもを行い、今後の農委活動に向けて英気を養った。

「個の可能性」「繋がり」活かす

持続可能な取り組みへ

持続可能な地域を目指すためには、「個の可能性」と「繋がり」の力が重要となってくる。



株式会社ファームサポーターズ・ラボ 代表取締役
岡部 由美子 氏

背景として2つの環境の変化に目を向けなければならぬ。1つ目は「人」の変化。人生100年時代に投入し、いつまでも求められる人材であり続けるためには、社会人基礎力(※)に加え、業界等の特性に応じた能力を常に更新していかなければならない。

核家族化、少子化、地域コ

地域での受け皿づくりが鍵 多様な人材で活性化

食料・農業・農村基本法の改正において示された「新たな展開方向」では、「多様な農業人材」の育成・確保が盛り込まれた。農地取得の下限面積要件が撤廃され、小規模でも農地取得が可能となった今、本当に持続的な「担い手」となりえるのか、その見極めを行うことと、人材の受け皿づくりが重要となってくる。



農業ジャーナリスト・
明治大学客員教授
榎田 みどり 氏

では、農業の担い手不足はもちろん、地域を支える人材不足と

いう課題に対し、すでに多様な農業人材活用への動きが広がっている。

参考事例①

長野県「半農半X」支援事業 平成22年開始。U・Iターンによる兼業就農を支援。農業の「生産効率」ではなく、「どうすればこの地域で生計を立てながら豊かに暮らせるか」という視点に基づき、農業以外の「X」部分についても自治体が地元企業等への紹介を実施するもの。平成30年からは「農ある暮らし」推進事業を開始し、相談センターを開設。相談対応後実際に就農や移住につながるなど、成果を上げている。

参考事例②

神奈川県秦野市・JAはだの農との関わり方に応じて別の受け皿として、「農に触れる(会員制による収穫体験、登録制の援農ボランティア等)」、「自身で体験(年間契約の体験農園)」、「本格就農(農業塾)」を用意。就農後の出口(＝販売

ミニティーの崩壊等で日常的に社会人基礎力を身に付けられる場が減少しており、企業や法人は社会人基礎力を学ぶ場として、教育機能を果たすこととな

る。様々なタイプの人材に対し、個々の対応が求められる。交流・対話を通じた経験の積み重ねにより、それぞれの「個の可能性」を伸ばし育てていくことが

先)についても確保し、10代からの新規就農を可能としている。「小さい担い手をたくさん育てる」ことを重視したもの。その結果、定年帰農、半農半X、専業農家など、多様な農業人材の確保・育成に成功している。

これらの事例を踏まえ、多様な農業人材とは、農業以外の活動も行う人材でもあり、地域の活性化という視点で見ると、その確保・育成は、波及効果が得られることとなる。もちろん、本人の適性や地域との相性などを見極め、フィルターをかけ、育てる仕組みが必要となる。さらに、下限面積撤廃により、農業技術や利用権設定期間、農地管理能力・自覚があるかなど、十分に見極めた上で、相手に適した選択肢を提供することが大事である。

農業者と非農家が、農業を通じて「食」や「地域」というテーマを共有し、つながっていくことが、「持続可能な地域づくり」になるのではないかと。(中島)

求められている。2つ目は「消費」の変化である。流行がどんどん変わる変化の激しい時代の中で、経営においては、「平均値」ではなく、

何が話題になっていくか、どこに需要が集中しているかという「最頻値」を見ていくことが重要。「最頻値」は変化が激しいため、速やかな情報収集という点において、様々な繋がりを構築することが強みとなってくる。

最近では、大手企業の殆どが昨年から賃上げを実施しており、生き残りを図っていくためには、この「人」と「消費」の変化に

対応しながら、経営体力を身に付けていかねばならない。では、農業分野ではどのような展開していくか。

参考事例①
「レッドライスカンパニー(株)」(岡山県総社市)
食品業界の民間の経験をもとに地域のブランド作物「赤米」を栽培。生産・加工・販売を一貫して行うほか、地元農家や企

業、行政を巻き込み、地域おこしの活動を行っている。

参考事例②
「有 梶岡牧場(山口県美祿市)」
儲かる農業経営者育成を目指す研究会を主催。新規就農者を含む農家らと共に「山口から農業維新を！」を合言葉に山口の農業発信に奮闘中。自身では、えさづくり・繁殖・レストラン営業までの一貫経営を行う。

これらに共通する強みは、人同士の繋がりがや交流による多様なネットワークの構築と、共感を呼ぶ「信念」・「倫理観」を活かした取り組みを展開している点にある。

委員の強みは、地域に生まれ育ち、現に生活していることと、それを活かした「情報収集力」。地域を持続可能なものとするために、是非その強みを活かし、

「変化を起こす人」として、リーダーシップを発揮してほしい。

(中島)

※前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として経済産業省が平成18年に提唱。

古民家活用から始まる つながる「人」と「まち」

「さの町場」で、古民家を観光交流の拠点とした取り組みを進めている。さの町場とは南海・泉佐野駅近くの旧市街。今でも蔵や古い町家が残っており、江戸時代は廻船業を営む人などが暮らす拠点として繁栄していた。

しかし、近年は一方で過疎化が進み、昔は栄えた商店街も廃れてしまった。台風で多くの町家が破損し、修理されないまま放置される建物も散見されるようになった。

そんななか、私の祖母が住んでいた築200年の古民家を何

とか活用する方法がないかと、市が実施する建物所有者と入居したい人とのマッチングを行うイベントに参加。そこで中学時代の同級生や地元さの町場の何とか盛り上げたいという志をもつ仲間と出会った。

約4年前に「さの町場家守舎 まちばの芽」と名付けたグループを作り、せっけんや水ナス漬の販売店主や会社員などさまざまな分野のメンバーが集まった。グループ名には「町並みと町家を守り、新芽のように育てていく」の意味を込めた。



さの町場家守舎 代表 健一 氏
まちばの芽 橋本

築200年の古民家をメンバーで大掃除をし、「くらふとや」と名付けて交流の拠点とした。月1回開催するマーケット「まちば日和」には、「自然」そうぞう(想像・創造)・「本当の健康」をテーマに毎回さまざまな店舗が出店。近隣の住民はもとより、家族連れが集い、さの町場を活気づけている。子どもたちもポン菓子やけん玉など昔のおもちゃに夢中になり、その遊び方を教えるおじいちゃん、おばあちゃんとの交流の場も生まれている。

問題のあった古い空き家も従来と違った視点で生まれ変わらせることで、人が集う拠点として再生することができている。こうした取り組みを継続し、活動の輪を広げることで地域の活性化につなげていきたい。(北川)

講演後の休憩をはさみ、一般社団法人日本ママヨガ協会の代表理事・カー亜樹氏より、ヨガ体操体験が行われた。

ヨガは、呼吸と姿勢、瞑想を組み合わせて心身の緊張をほぐし心の安定を図るもので、インドで誕生したといわれている。「ヨガ」はサンスクリット語で「つながり」を意味し、心と体が繋がっている状態を示す。この日の研修テーマも「人とのつながり」。

日々農地の見回り活動や農家の意向把握など、活動に取り組み委員に対し、自身で体調を整える手法の一つとして知っても

日々の体調を整え、農委活動に取り組もう！

「変化する人」として、リーダーシップを発揮してほしい。

(中島)

※前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の3つの能力(12の能力要素)から構成されており、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力として経済産業省が平成18年に提唱。

らうことを目的に研修内容に盛り込まれた。

体験では、椅子に着席した状態で上半身を中心に行われ、四拍の鼻呼吸を意識しながら、体の部位を伸ばす様々なポーズ(姿勢)を体験した。どの会場も初めて体験する参加者も多く、体験後に「体がほぐれた」「気分がすっきりした」など、慣れない場所に緊張の面持ちだった表情を和らげながら口々に話す様子が見られた。

(中島)



中・北河内・大阪市地区